第１０回研究大会

口頭発表「学校獣医師制度8年が経過して」

－八戸市学校飼育動物ネットワーク－

妻神和憲　左近允美紀

現在，社会生活の多様化とともに動物たちと触れ合う機会は少なくなり，「生命」を軽視する傾向や心の荒廃が社会問題となっております．そのため動物愛護や心の健全な育成のために幼稚園や小学校では動物飼育を奨励されており，その活動を獣医師が支援するという動きは全国的なものとなってきております．

八戸市においても，平成13年より常に健康な小動物とのふれあいを通して，幼児児童に豊かな心を育むために，学校飼育動物の飼育管理などについて，地域の獣医師と連携したネットワーク支援事業を実施しております．今回、活動８年を経過して，様々な成果や課題が見えてきました．当獣医師会の活動の特徴を紹介すると同時にその成果と課題を総括し報告致します．

八戸における学校飼育動物ネットワーク構想図を示します．（図１）市内の公立小学校48校１幼稚園を５つのグループに分け，グループ毎に学校獣医師を配置いたします．各学校獣医師は年１回の訪問活動を

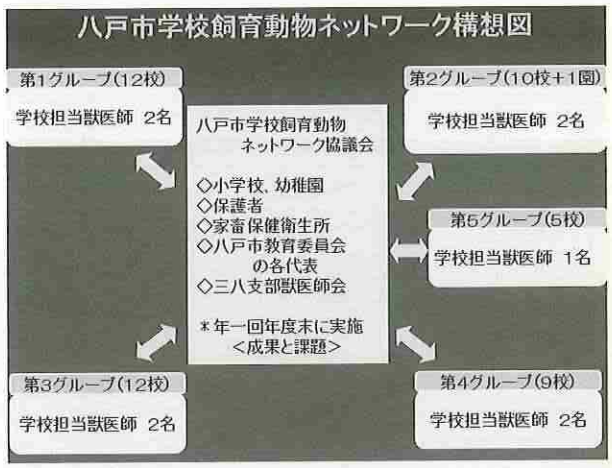


図１　八戸における学校飼育動物ネットワーク構想図

行い，小動物を用いての「ふれあい活動」と学校での飼育管理が適切に行われるように指導，助言する「適正飼育管理指導」を行っています．この事業を実施するにあたり，学校，学校獣医師といった現場サイドと保護者，教育委員会，家畜保健衛生所，獣医師会が連携し，協議会を作っております．この事業を立ち上げるにあたって，八戸市では最初に平成11年６月，中川美穂子先生をお招きして動物飼育研修講座を開催し，獣医師と各学校の飼育担当者や校長に啓発活動を実施いたしました．また，平成12年には教育委員会から学校飼育動物支援システム策定事業を受け，策定委員会を開催し，同時に市内小学校をまわって，飼育管理状況の調査とアンケートを実施いたしました．その結果から飼育や環境に対しての指導や助言を求める要望が多く見られた為，平成13年より獣医師による訪問活動が実施されております．

平成13年度，訪問活動を実施しはじめた頃，新聞で取り上げられた紙面です．（図２）

学校飼育動物ネットワーク支援事業の一年の流れを示します．先ず，5月上旬には委嘱状交付式が行われます．獣医師会から教育委員会へ推薦された獣医師が，教育長より学校獣医師として辞令交付を受けます．八戸市の学校獣医師制度は地方公務員法に規定する非常勤職員としての活動が特徴でもあります．５月下旬にはネットワーク支

新年度から八戸市

学校獣医師制度を導入

幼稚園・小学校の飼育支援

全国初、非常勤職扱いに

図2　学校獣医師制度導入の新聞記事

援事業学校説明会が行われます.各学校の担当者に対して,教育委員会から事業の目的や事業計画の立て方の説明ならびに,獣医師から動物飼育に対しての啓発や,ふれあい活動の計画作成の助言を行います.担当者事前研修会では,各学校の担当者が計画案を持ち寄り,担当獣医師と日程調整や授業内容について細かく話し合います.8月に決定した計画案に沿って,各学校獣医師が担当校をまわり訪問活動を実施します.また,原則では年1回の訪問活動となっていますが,学校側からの電話や依頼によって各学校獣医師は年数回,学校訪問を実施している先生がほとんどです.

図3　犬を用いたふれあい活動

動物を飼育していない学校に対して犬を用いてふれあい活動を実施している一例です.（図3）ウサギやにわとりだけでなく他の動物での子どもたちの反応を見るために時々,他の動物での活動を実施することもあります.動物を飼育している学校においては,ふれあい活動終了後に飼育状況を見ながら,適正に飼育するための管理指導を行っています.ふれあい指導終了後には学校担当者,学校獣医師ともに10月末までに報告書を教育委員会に提出し,学校獣医師においては,11月の上旬,学校担当者においては下旬に事後研修会が行われ,各々の成果や課題を報告し合っています.1月下旬から2月上旬には学校飼育動物ネットワーク協議会を開催します.出席メンバーは教育委員会,学校,保護者,家畜保健衛生所,獣医師会の代表者が出席し,各々の立場から,本年度の成果と課題を報告し,協議しています.

また,獣医師会では小動物によるふれあい授業の他に希望校において,ふれあい乗馬体験も実施しております.9月の動物愛護週間には飼育環境の改善や活発な委員会活動を行っている学校に対して,表彰を行っています.

当獣医師会では,動物飼育を行っていない学校での訪問活動をするためにウサギの飼育を行っております.またそのような学校が飼育を希望した場合にはウサギの繁殖を行い,希望校に寄贈しています.寄贈したときの活動内容が紹介された新聞記事で

三八支部獣医師会から〝転校生〟

ウサギさん仲良くしてね

八戸

是川東小児童

手伸ばし歓声

贈られた子ウサギを囲む是川東小の児童たち

図4　ウサギを寄贈したときの新聞記事

す.（図４）

その他ネットワーク事業の活動実績として平成17年には文部科学省の永田先生,筑波大付属小学校の森田先生,群馬県獣医師会の桑原先生をお招きし学校飼育動物シンポジウムを開催し,動物飼育担当の先生や獣医師の知識向上に努めました.また,毎年飼育担当の先生が変わったり,伝達がうまくいっていないとの課題の報告から平成18年には数名の獣医師により学校飼育動物管理マニュアルを作成し,市内の小学校に配布いたしました.

ふれあい指導における８年間の変化として開始当初は高学年における委員会活動への獣医師の委員会視察という形の学校がほとんどで低学年の児童に対する動物とのふれあい授業の形式をとる学校は少ないものでありました.8年たった現在では,ほとんどの学校において低学年に対する動物とのふれあい授業を実施しており,その後に委員会活動の様子をみるといった飼育動物適正管理指導がおこなわれております.

初年度から３～５年目くらいまでは,１～２年生におけるふれあい指導教室も各学年複数クラスのうちの１クラスのみで実施する学校が多かったのですが,現在ではほとんどの学校において学年全体でふれあい教室を実施するようになっています.発足当初は教育委員会からの押し付けと受け止めている学校もあったようであるが,今はこの意義を感じ積極的に全児童へのふれあい活動を行わせる方向へと変わってきていると受け止めております.

以前に比べ屋外の飼育舎の環境整備に力をいれる学校が増えてきています.学校の記念行事にあわせて飼育舎を建て替えるなどの学校も見られますが,それ以外に,掃除回数の増加,冬季の寒さ対策,ならびに病気,怪我をしたときなどに素早い処置を行うなどの改善がみられています.ちなみに治療費は当獣医師会が予算枠を設け負担しており,学校側からは治療費を受け取っておりません.また日常において飼育の疑問や動物に関しての相談がすぐにできて便利だというお話もいただいております.

我々が活動を始めてから,各学校では動物に名前をつけて呼び,飼育ノートをつけるといったことが日常化しました.それによって,動物を細かく具体的に観察する力が養われているようです.また,ふれあい授業をうけた児童たちが登下校時には動物のそばによって行き声をかけている姿が多くなったとの報告を受けております.まだ数校ではありますが,５～６年生対象の委員会活動による飼育形式から４年生による学年全員での飼育に変更している学校が見られています.これは学校飼育研究会での活動報告などを積極的に学校側へ情報提供することによりそれらを参考に学校側が動物飼育の全員参加によって児童に飼育の経験を積ませようという意図がうかがえます.

課題としましては,授業時間45分の中で30人前後の児童の参加であった為,動物の頭羽数は少なくてすみました.しかし,現在では,複数クラスの児童を一斉に授業した場合の新たな問題が発生しています.問題点としては,動物数,スタッフ数の確保,全児童に十分な時間を触れ合わせるための時間の確保といった点です.それらの問題に対しては,動物数に関しては他校からの一時借り上げや獣医師会や各獣医師が飼育している動物を連れて行ったりして対処しております.スタッフの人数確保においても担当獣医師の病院スタッフを連れて行ったり,保護者ＰＴＡの協力を仰いでおります.また,時間設定に関しては人数が多すぎて活動が十分できない場合には,担当獣医師が訪問回数を増やし,複数回のふれあい教室を実施して対処しております.現在は,対象児童の増加によって各担当獣医師のふたんが増えてきており,ふれあい訪問活動の意義を理解し協力を惜しまない開業獣医師の増員が課題の一つとなっております.

２点目として,学校獣医師の活動後研修会で毎年出る話題として,一生懸命に活動する学校とそれをしない学校に大きな温度差が見られるということです.この温度差の原因は校長先生や担当教諭の動物飼育に対する興味のなさが一番の原因と思われます.そのような学校は改善提案を受け入れてもらえず,次年度も同じ状態ということが多いようです.しかしこのような学校も,開始当初から比べると,ずいぶんと減ってきているのも事実です.

３点目として,指導する側の学校獣医師には問題がないのか？ということも常に問わなければならないと思っております.以前,訪問していた先生とまったく異なった指導が行われていないか？学校側が指導した所を守っていないからといって威圧的な

態度をとっていないか？また，学校側の教員に対するアンケートで獣医師にも温度差があるのでは？といった意見も見られました．これに対しては，獣医師であれば誰でもいいというのではなく，学校飼育動物のふれあい活動に対する意味を理解し，研鑽に励むための研修会を充実させ担当獣医師のレベルアップにつなげなければならないと思っております．

それでは，各論に移ります．

まず，活動当初の飼育舎の状態ですが，うさぎや鶏がやぶれた金網越しに行き来したり，地面に大きな穴を掘ったりしていました．雌雄鑑別が出来ていないため，うさぎがどんどん増えてしまったり，給食のパンの残りを与えられるなど，誤った飼育方法の学校が多く見られました．

うさぎが、飼育舎の間仕切りのブロック下を掘って，隣と行き来しており，いつ事故が起きてもおかしくないような状況でした．

そこで正しい知識のもとで適切に飼育することが必要で，専門家として獣医師の協力の必要性を強く感じました．

学校側に飼育管理助言活動を行ってから，雌雄判別をすることでむだな繁殖を防ぎ，適正な飼育数にすることができました．餌の内容や，季節毎の飼育舎の改善策，衛生管理を指導することで適正な飼育環境にも近づいてきています．動物に名前をつけて，個体識別し，飼育管理ノートを作ってもらうことで飼育担当の先生が替わっても対応できるようにしてもらっています．

飼育舎には，子どもの手書きの絵や，先生が作ってくれた写真入りポスターを掲示しています．（図５）

図５―１　写真入りのポスター

図５―２　手書きのポスター

実際，私がうけもっている担当校ですが，小規模校１校，大規模校５校の計６校になります．年１回以上のふれあい活動ならびに飼育管理助言，電話・ファックスでの助言や，病院での診察治療を行っています．

是川東小学校は，全校生徒11名の小規模校で，学校全員で動物をお世話しています．小学校の玄関でケージ内飼育をしており，長期休業中のお世話は今まで先生がしていました．飼育うさぎの死を経験し，今現在，新しいうさぎを飼育中です．

小学校玄関を入ってすぐの所に，うさぎ

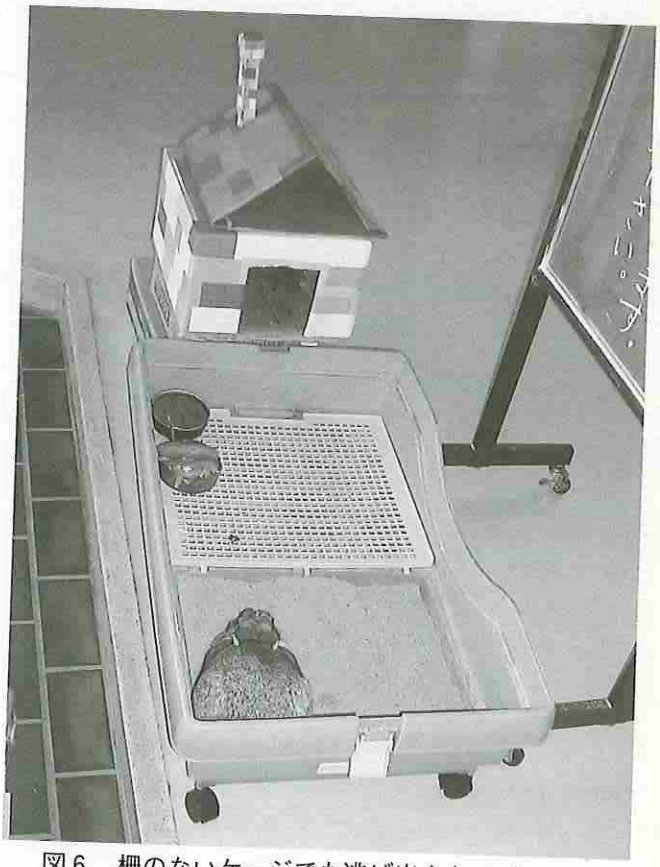


図６　柵のないケージでも逃げ出さないバーニー

の飼育ケージがあります．先代うさぎのバーニーはとてもおとなしく，柵が無くても逃げ出すこともありませんでした．子ども達は，ずっとうさぎというのは，こういう生き物だと思って飼育していました．（図６）

バーニーは７歳で子宮の病気になり，徐々に衰弱し，夏休み中に残念ながら亡くなってしまいました，先生が連絡網で子ども達に連絡し，お別れ会を実施しました．可愛がっていた動物の死に直面し，子ども達は改めて命について考えたようです．（図７）

図７　バーニーのお別れ会の様子

動物が死んだときの対応として，死んでしまうと生き返ることはなく，それはとても悲しいことだが，命には終わりがあるということを実感させることが重要だと考えます．

バーニーが亡くなった後，新しいうさぎを飼育していましたが，校長先生から，子ども達に新しい命の誕生を経験させたいとご相談がありました．妊娠出産には，少なからず危険がともなうこと，出産後も子どもを食べてしまうことがあること，生まれた子ウサギの行き先などを検討した上で，子ども達とも十分話し合い，交尾出産を計画することにしました．

子ども達が手作り結婚式を開催し，妊娠５匹出産しました．残念ながら１匹は亡くなりましたが，４匹は順調に生育しています．出産後は，定点カメラでケージ内の様子を撮影し，あまり人は近づかないように配慮しました．毛の生えていないうさぎの赤ちゃんが，ドンドン大きくなっていく様子を見ながら子ども達は感慨深そうです．自分たちより小さかったうさぎが，いつのまにか大きくなり出産したのですから．

小規模校のメリットとして，教師，子ども，地域の人たちの多くの目で観察し，少しの異常でも気付くのが早いということです．常にお世話をすることで，愛情が芽生え，教員や子ども達も家族のようなつながりがあります．学校が１つの家庭で，その中でうさぎも家族の一員という感じです．

柏崎小学校は，大規模校で，私の病院の一番近くの小学校でもあります．小学校の記念行事用に予算がついたため，新飼育舎を建設することになり，いろいろ助言を求められるなど良好な関係を築けている学校です．

飼育舎を建てるにあたり，当時の６年生に理想の飼育舎の絵を描いてもらったところ，約1/3の子どもが飼育舎と隣り合わせた遊び場の絵を描いていました．広いところを走り回りたいのだろうと，想像して描いたのでしょうか．（図８）

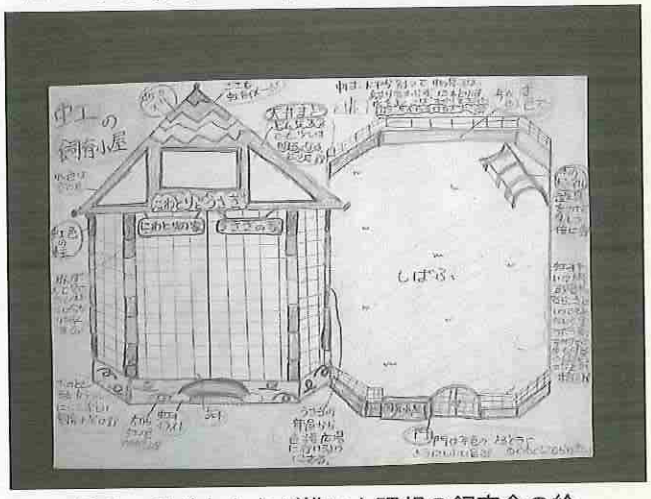


図８　子どもたちが描いた理想の飼育舎の絵

今までの飼育舎は，校舎の中央に位置し，日当たりも悪く，子どももあまり近づかないような場所でした．新飼育舎は、校舎に入る玄関の近くに作られ，こどもたちが登下校の際には，目に付きやすくなっています．コンクリートの床なので，今までより掃除もしやすく，清潔な飼育舎になっています．

病院に近いということもあり，調子が悪くなるとすぐに連絡を頂き，診察させてもらっています．うさぎの尿が赤いということで来院され，泌尿器には問題はなかった

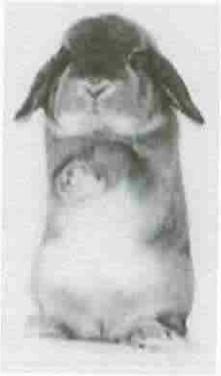
のですが，子宮の病気ということが判明しました．全身麻酔下での手術で危険が伴うことをお話しし，学校で相談の上，手術を実施することになりました．順調に手術も終わり，手術報告書を添えて退院させたところ，校長先生が，あらためて動物の命というものを考えなおしましたとおっしゃっていたのが印象的でした．子ども達だけではなく，教員も含めて小さくても一生懸命生きている命というものを考え直すきっかけになったのではないかと感じています．手術後は，しばらく，職員室前の廊下でケージ飼育されていましたが，情動障害のある子どももうさぎがいるとき，かなり落ち着いていたようです．

大規模校のメリットとして，ふれあい指導後に，小学校全体に伝達講習ができること，飼育委員会の５，６年生の子ども達に，より専門的に指導できることがあげられます．

この８年間を通して，ふれあい活動ならびに飼育管理指導により飼育方法やえさの改善は早期に実施されました．しかし，予算のかかる飼育舎の改善や，活動に対する校長先生の理解は８年たった今でも不十分な点はあります．

八戸市ではこの事業への参加を希望校ではなく全校で一斉に実施した経緯があり，必ずしも現場の理解がなされてから実施したものではありません．そのために開始当初は，「教育委員会からの押し付け」という意識で実施していた学校の姿も見受けられました．しかし，継続的な実施において学校側のこの事業にたいする受け入れ方に変化の見られる学校が増えてきたと実感しています．この間，我々獣医師サイドは現場に対し，改善が見られないからといって，威圧的な態度をとらないように心がけ，見守るような形で接してきました．それにより徐々にではありますが，この活動に対する理解が得られてきていると受け止めております．

今後の展開として，校長会や教員研修においてこの活動の意義を広め，多くの関係者の理解が深まるように活動していきたいと思っています．

また，青森県内において積極的に動物支援活動を行っているのは八戸地域のみであり，より積極的な支援活動を行うことによって支部獣医師会だけの活動から全県的な活動に発展させていきたいと思っています．

（(社)青森県獣医師会／
青森県三八支部獣医師会）